

ただいまパリに滞在中



防災基礎科学技術研究部門 主任研究員 岩波 越

センター
CEPT

私は防災科研の「中期在外研究員派遣制度」を利用して、昨年9月下旬から約半年の予定でパリに住んでいます。受け入れてもらった研究機関は、地球惑星環境研究センター（CEPT）で、パリ郊外の大学のキャンパスの中にあります。私はエッフェル塔の近くに部屋を借り、地下鉄とバスを使って通っています。

雨の量を広い範囲にわたってきめ細かく正確に知ることは、大雨、洪水、土砂崩れなどの災害を予測して防ぐためにとても大事なことです。防災科研は新しい技術を取り入れた気象レーダー（電波を使って離れた場所から雨、雪や雲を見つけ出し、その位置や強さなどを測るための装置）を持っています。このレーダーのデータから雨の強さを正確に推定するために、私はCEPTの研究者が開発した方法を改良しながら使っています。

気象レーダーを使ったヨーロッパでの研究の様子

この機会を利用して、11月にはオランダのデルフトで開かれた「第2回ヨーロッパ・レーダー気象学会議」に参加し、2月にはイギリスのレディング大学を訪問しました。どちらでも研究用の気象レーダー施設を見学しまし

た。

ヨーロッパでは、複数の国の研究機関による共同研究が盛んに行われていて、その中で競い合っています。地理的な近さはもちろんですが、ヨーロッパ宇宙局（ESA）のような機関が、多くの研究費を出していることも理由の一つです。日本と比べると、雨や洪水の予測を行っている現場での利用を目指した研究の発表が目立ちました。また、人工衛星にレーダーを載せて、地球全体の雨や雲の様子を調べる計画も進んでいます。これらの両方と深く関わる雨粒の大きさと数（粒径分布）に関する研究にも力が注がれています。

"Do you speak English?" （「英語を話せますか？」）

こんな宣伝文句が使われた英会話学校のポスターを地下鉄の中で見かけます。西ヨーロッパの中で英語が通じにくい国として、フランスとイタリアがよく挙げられます。確かに、観光客が集まる場所以外では英語を話してもらえません。

CEPTでは、おおよそ若い研究者ほど英語が上手で、技術系、事務系の職員にはほとんど英語を話さない人もいます。こちらでの同僚たちは、学校での英語教育が日本と同じように読み書きや文法に重点が置かれていたこと、たとえばテレビで放映される映画のほ

とんどがフランス語に吹きかえられるなど英語に触れる機会がまわりの国より少ないこと、上手ではない英語を話すことへの抵抗感（フランス人の「誇り」に反する）などを理由に挙げています。

災 害

この冬の天候は、12月の記録的な暖かさ、4年ぶりという1月初めのパリでの積雪と、例年とはかなり違ったものだったようです。図はフランス気象局が発表する注意報・警報地図の一例で、テレビの天気予報やインターネットで見ることができます。この日、プロチームのサッカー場が水浸しになるような洪水、雪と路面凍結による交通障害（無謀なトラック運転手の自動車道路への進入で事態はさらに悪化するのが常のようです）や転倒事故が報道されていました。

雪崩に関しては、雪崩犬を軽飛行機に乗せて山中へ救助に向かうという試みがニュースで紹介されていました。自然災害ではありませんが、11月に起きたタンカー事故による重油処理は



フランス気象局（メテオ・フランス）が発表した2002年12月12日の注意報・警報地図。県ごとに危険度が4色（緑、黄、オレンジ、赤）の色分けで示されます。対象は強風、強雨、雷雨、雪・路面凍結、雪崩の5種類で、この日はフランス北東部（雪・路面凍結）と南東部（強雨）にレベル3（オレンジ色）の警報が出されていました。

いまだに続いています。

日 本 発

電気店のオーディオ、ビデオ、カメラ関係はほとんど日本メーカー製です。「すし」と「マンガ」はすっかり定着しています。宮崎駿監督のアニメーションは大好評で、最新作の封切後、1986年の作品が公開されるほどです。帰国が2週間後に迫ってきました。CETPとの共同研究は今後も続けていく予定です。こちらでの経験を今後の仕事に活かしていきたいと思っています。



12月の小雨のシャンゼリゼ大通り。イルミネーションは、冬の長い夜を楽しく過ごすための工夫でしょう。